楊貴妃と熊野権現垂迹縁起と飛行三鈷

―中世の熊野信仰の正体に関する仮説３―

蓑　虫

はじめに

熊野Ｎｏ１５７号で、筆者は、熊野の様々な伝承やイメージに楊貴妃が隠されており、熊野に楊貴妃が西王母として祀られている事、貴族たちの熊野参詣が楊貴妃信仰であったことを示した。Ｎｏ１５８号では、楊貴妃にキツネのイメージがあったことを示し、阿倍仲麻呂と吉備真備が連れてきたというキツネの美女の伝承に楊貴妃の渡来説が隠れていることを示した。また、このキツネの美女の渡来伝承が、大江匡房に発掘され、平安時代末期の熊野参詣ブームと稲荷参詣ブームを引き起こした事を述べた。

今回も、編集者の好意をいただき、その続きをお話しさせていただく機会を得た。

『長寛勘文』[1]に記載された『熊野権現垂迹縁起』についてはＮｏ１５７号でも、これが楊貴妃の渡来を著したものではないかとして少し触れたが、今回は、これをこれまで得た知識をベースにもう少し詳しく分析し論考を進めたい。

一　熊野権現垂迹縁起と彦山流記

まず、『熊野権現垂迹縁起』の始めの方を見てみよう。

熊野権現垂迹縁起抜粋

往昔、甲寅年唐乃天台山乃王子信奮跡也。日本國鎮西日子乃山峯雨振給。其躰八角奈留水精乃石高佐三尺六寸奈留仁天天下給布

訳

昔、甲寅の年、唐の天台山の王子信（王子晋）の旧跡が、日本の鎮西（九州）の日子の山峯（英彦山）に天降りになった。その形は八角形の水晶の石で、高さは３尺６寸。そのような姿で天降りになった。

これによく似た文書が九州の「英彦山」に伝わる『彦山流記』にある。[2]

彦山権現垂迹縁起抜書

夫権現昔者　抛月氏之中國　渡日域之邊裔給初、遥志東土利生知垂迹和光砌。自摩訶提國投遣五剣之後、甲寅歳震旦國天臺山王子晋之奮跡東漸。御意深凌西天之滄波　交東土

之雲霞、其乗船舫親　在豊前國田河郡大津邑、今號御舟是也。（中略）其垂迹之始、先八角水精石、躰三尺六寸形。般若窟上天降　給所投遣之第一剣　此窟上見付給時、四十九箇窟　各　御正躰分　権現并　守護天童　奉安置之、即一万十萬　金剛童子是也。

訳

彦山権現は、昔、中国の月氏（月支）国から遥か東土に教えを垂れようと日の本をめざしてお渡りになったのが初めです。自らマカダ国から五剣を投げた後、甲寅の歳に震旦国天台山の王子晋の旧跡から東に進まれました。その御心は深く西天の大海原の波を凌ぎ、東土の雲霞をかき分けて、その乗った御舟は豊前国田河郡大津村に着きました。今の御舟というところが是です。（中略）その垂迹の初めは、八角の水晶石で身体は三尺六寸でした。般若窟の上に天降って、先に投げた第一剣をこの窟の上で見付けられて、49個の窟に御正体を分けられて、権現、ならびに守護天童として安置し奉いました。すなわち、一万十万金剛童子がこれであります。

『熊野権現垂迹縁起』に「熊野権現」が、唐の国を出発した後、「英彦山（彦山）」に天降ったと書かれているのであるから、「熊野権現」と「彦山権現」が同一であることは間違い無いであろう。『彦山流記』には、建保元年（1213）癸酉七月八日の奥書がある。これは、長寛元年（1163）から書かれた『長寛勘文』に収録された『熊野権現垂迹縁起』よりは記録が新しいが、記録されたのがこの時代というだけであり、『熊野権現垂迹縁起』と『彦山流記』の伝承とどちらが古いか、何時、作られたのかは、判断が出来ない。

ただし、『彦山流記』は『熊野権現垂迹縁起』とほぼ同時代に記録されたものであるし、『彦山流記』が『熊野権現垂迹縁起』と関連しており、『熊野権現垂迹縁起』を補うものであることは間違いあるまい。

『彦山流記』には、「マカダ国から五剣を投げる」話があるが、これは、室町時代に書かれたとされる『神道集』[3]の『熊野権現の事（熊野本地）』（五衰殿の女御）にある王が五本の剣を投げ、降臨する地点としたとする話と共通している。また、マカダ国、中国を経由して、日本にやってくるというパターンは、九尾の狐伝説の玉藻前とも共通している。五衰殿の女御や玉藻前が、楊貴妃をモデルとしている事は、No157号とNo158号ですでに述べたが、この『彦山流記』にも同じイメージがあることになる。

そして『彦山流記』から「熊野権現」が天台山の王子晋の旧跡から船で日本にやってきたイメージがある事もわかる。

「王子晋」とは何者であろうか？一般に、「王子晋」は、別名「王子喬」とも言い、周の霊王の太子だとされている。しかし、「王子晋」には、それ以外の別のイメージがある。

伝説の「王子晋」は、道士浮丘公に従って嵩高山に上り、仙道を修得し、白い鶴に乗って、笙を吹きながら空中を飛翔したというが、中国のサイトを見るとこれは「王子登仙」の話が元になっているという。[4]

さて、この「王子登仙」だが、これはＮｏ１５７号に示した『長恨歌』に引用される七月七日に漢の武帝が西王母と交情を結ぶ話の中で、武帝に西王母の来訪を告げる役割をする仙女である。（『漢武内伝』[5]参照）すなわち、「王子登仙」はＮｏ１５７号に示した「董双成」と同じく、西王母の直属の侍従であり、西王母と楊貴妃が同一視されていたことを考えれば、楊貴妃に仕える仙女のイメージがあるのだ。

さらに、李白は「董双成」について、次のような詩を読んでいるが、

桂殿秋　李白

仙女侍，董双成　　仙女は侍る董双成
桂殿夜寒吹玉笙　　桂殿の夜は寒く玉笙を吹く
曲終却从仙官去　　曲を終わって仙官を去れば
万户千门空月明　　万戸千門に、月明かりが射す

まるで、この返歌のように白居易は、「王子晋」について次のような詩を詠んでいる。

王子晋廟　白居易

子晋庙前山月明　子晋の廟の前の山に月明かりがあれば
人闻往往夜吹笙　人は往々にして夜、笙の音を聞く
鸾吟凤唱听无拍　鸞や鳳凰の鳴き声ではなく
多似霓裳散序声　霓裳の唄の散序の調べに似る

すなわち、「王子晋」に、西王母に仕える「董双成」と同じイメージがあることは明らかであろう。さらに言えば、ここに登場する「霓裳の唄の散序」とは、楊貴妃の得意とした『霓裳羽衣歌』の事で、白居易の書く『霓裳羽衣舞歌』には、『霓裳羽衣歌』は、散序（踊りをまじえない演奏だけのイントロ部分）が六奏あったと紹介されている。[6]

「王子晋」には確実に楊貴妃のイメージがあるのだ。

さて、先に述べたように、この縁起は、熊野権現（楊貴妃）が天台山の王子晋の旧跡から船で日本にやってきたとするわけだが、熊野権現（楊貴妃）は、中国のどの港から出航したのであろうか？

地図を確認すれば、天台山の麓に大都市、寧波（明州）が

広がる。（図①）おそらく、熊野権現（楊貴妃）は、この寧波（明州）から出航したと考えられていたであろう。

二　阿倍仲麻呂の明州からの出航伝説

さて、No158号で楊貴妃の渡来説には、阿倍仲麻呂の帰朝説が関連していることを示した。

阿倍仲麻呂と言えば、「天の原　ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも」という詩で知られているが、これは古今和歌集に「羈旅歌（きりょのうた）」として書かれる。この古今和歌集には、次のように解説が書かれている。

図①　天台山周辺地図

この哥は、むかしなかまろをもろこしにものならはしにつかはしたりけるに、あまたのとしをへて、えかへりまうでこざりけるを、このくにより又つかひまかりいたりけるにたぐひて、まうできなむとて、いでたちけるに、めいしうといふところのうみべにて、かのくにの人むまのはなむけしけり。よるになりて月のいとおもしろくさしいでたりけるをみて、よめるとなむかたりつたふる。

現代文解釈

この歌は、昔、仲麻呂を唐に物を習わしに遣わしたのだが、余多の年を経ても、よく帰ってくることが出来なかったのを、この国より又使いがやって来たのに合わせて、一緒に帰ってこようとして、（日本に向けて）出発したのであったが、明州というところの海辺で、彼の国（唐）の人が、餞別の宴を行ってくれた。（この時）夜になって月がとても美しく上ってきたのを見て、詠んだものと語り伝えられている。

さて、この説明文を解釈すれば、この詩は、753年の終わり、阿倍仲麻呂が、日本の遣唐使節団の唐側送使長として吉備真備等と共に、日本に帰ろうとした時に詠んだ詩だと書かれている事になる。

しかし、そうだと解釈するとわからない事がある。

この時には、鑑真も一緒に唐の国を出航したのだが、淡海三船の書いた鑑真の伝記『唐大和上東征伝』によれば、この遣唐使節団が出航した港は、蘇州であり、明州ではないのだ。

筆者は、Ｎｏ１５８号で阿倍仲麻呂が楊貴妃を伴って７５６年に再び、唐の国を出航したのではないかという仮説を立てた。阿倍仲麻呂が明州から出発したというのは、７５６年の時の話ではなかったであろうか？

さらに、筆者は、楊貴妃は阿倍仲麻呂と共に唐の国を出航した後、大宰府に大弐として就任していた吉備真備に預けられたとしたが、「英彦山」は大宰府の隣に屹立する霊山である。筆者は、この点から考えても、『熊野権現垂迹縁起』は楊貴妃の渡来の記録を著したものだと推測するのである。

ただし、筆者は、「天の原　ふりさけみれば春日なる　三笠の山に出でし月かも」の歌を、７５６年に人々が、阿倍仲麻呂と楊貴妃を見送った時に作ったものだとは考えていない。

古今和歌集は、紀貫之によって編纂されたものだとされているが、筆者は、Ｎｏ１５７号で『源氏物語』に書かれた宇多法皇が作った長恨歌の屏風の記述に、「伊勢、貫之に詠ませたまへる」とあることを紹介した。すなわち、紀貫之は、楊貴妃渡来について、ある程度、知識を持っていた事になる。

筆者は、紀貫之は、古今和歌集を編纂するにあたり、楊貴妃渡来の記録を隠す役割も朝廷から命じられていたのではないかと考える。

それが、この古今和歌集に「天の原　ふりさけみれば春日なる　三笠の山に出でし月かも」の歌が唐の国で詠まれたものだというお話を掲載させた理由であったのではなかっただろうか？

だが、筆者は、紀貫之が、阿倍仲麻呂の帰朝の記録を隠蔽する役割を命じられながら、それを不本意に考えていたのではなかったかとも想像している。

もし、阿倍仲麻呂の詩が古今和歌集に書かれた説明の通りに詠まれたものであれば、これは「望郷歌（ぼうきょうのうた）」とすべきであっただろう。紀貫之が、これを「羈旅歌（きりょのうた）」・・・旅の情景を詠んだ歌だとして紹介しているのはおかしい。

さらに、紀貫之は、阿倍仲麻呂の詩として、『土佐日記』に「蒼海原　ふりさけみれば春日なる　三笠の山に出でし月かも」という詩を掲載している。筆者は、この詩こそ、阿倍仲麻呂の詠んだ本当の詩ではないかと推測する。

この「蒼海原　ふりさけみれば春日なる　三笠の山に出でし月かも」という詩から想い浮かぶ情景は、この詩が詠まれたのは、島影の一つも見えない海の上に浮かぶ船の上であって、阿倍仲麻呂は、航海に不安を感じながらも、甲板に立ち、空を見上げ、奈良の都と同じ月に安らぎを見出しているのである。

すなわち、この詩が詠まれたのは、阿倍仲麻呂が奈良の都から唐の国に向かう船中であって、Ｎｏ１５８号で推測した７５９年に高元度の船で、再び、唐の国に立ち戻ることとな

った時のものだと筆者は考える。

そして、この阿倍仲麻呂を見守る月のイメージには、奈良の地に残さざる得なかった家族の面影も重ねられていたと考えられるのだが、現段階の論考の進行時点では、これ以上説明をすることが出来ない。（本論の後半で、月に妊婦のイメージがある事を示す。）

「天の原　ふりさけみれば春日なる　三笠の山に出でし月かも」の詩は、万葉集にも類系の見られる駄作である。

しかし、もし、本当の阿倍仲麻呂の詩が「蒼海原　ふりさけみれば春日なる　三笠の山に出でし月かも」であり、先のような情景で詠まれたのであれば、これは傑作であろう。

紀貫之は、これを捨て去ることを偲びなかったに違いない。

三　熊野の犬飼と三狐神

さて、『熊野権現垂迹縁起』の中段部分からも、様々に興味深いことが読み取れるのであるが、現段階の論考の進行時点では、これを解説することが出来ない。

そこで、『熊野権現垂迹縁起』の後段部分の解釈に話をすすめる。

熊野権現垂迹縁起抜粋

庚寅農年石多河乃南河内乃住人熊野部千輿定土云犬飼。猪長一丈五尺奈留射。跡追尋旦石多河於上行。犬猪乃跡於聞旦行仁、大湯原行旦。件猪乃一位農木乃本仁死伏世利。宍於取旦食。件木下仁一宿於經旦木農末月乎見付旦問申具。何月虚空於離旦木乃末仁波御坐止申仁。月犬飼仁答仰云。我乎波熊野三所權現止所申。一社乎證誠大菩薩土申。今二枚月乎者兩所權現土奈牟申仰給布云々。

訳

庚寅の年、石多河（石田川）の南、河内の住人、熊野部千代定という犬飼（猟師）が体長1丈5尺（約4．5m）もの猪を射た。跡を追い尋ねて、石多河を遡った。犬が猪の跡を追って行くと、大湯原に行き着いた。

件の猪は一位の木の本に死に伏していた。肉を取って食べた。件の木の下で一夜、泊まったが、木の梢に月を見つけて問い申し上げた。「どうして月が虚空を離れて木の梢にいらっしゃるのか」と。

月が犬飼に答えておっしゃった。「我は熊野三所権現である」「一社は證誠大菩薩と申す。今2枚の月は両所権現と申す」とおっしゃった。

これと関連すると思われる文書が、No157号にも紹介

した「奥熊野玉置神社」の古文書『玉置山権現縁起』[7]にある。一部を抜粋する。

玉置山権現縁起抜粋

三狐神　所謂天狐地狐人狐也。於新宮者飛鳥ニ住。則漢司符将軍之妻室。三大明神之母也。権現之御氏人千与定子。

訳

三狐神　所謂　天狐　地狐　人狐なり。新宮に於ては飛鳥に住む。則ち漢司符将軍の妻室なり。三大明神の母なり。権現の氏人　千与定の子。

この『玉置山権現縁起』に登場する「千与定」と『熊野権現垂迹縁起』に登場する「千代定」とは同一人物であろう。だとすれば、『熊野権現垂迹縁起』に登場する「三枚月」と『玉置山権現縁起』に登場する「三狐神」とは同一のものを指しているのではないかという考えが浮かんでくる。

狐は古語で「ケツ」と言う。すなわち、ここには月「ゲツ」のイメージがある。実際、「三狐神」を「御饌津神」とも書くが、神道の聖典である『倭姫命世記』には次のようにある。[8]

倭姫命世記抜粋

天地開闢けし初め、神宝出でます時、御饌津神と大日霊貴（天照大御神）と予め幽けき契りを結び、ひたぶるに天下を治め、言寿ぎ宣りたまう。かるがゆえに、或は月と為り日と為り、永く懸かりて落ちず

国文学資料館 https://www.nijl.ac.jp『倭姫命世記』参考

すなわち、御饌津神（三狐神）は月となったと書かれる訳である。『熊野権現垂迹縁起』に登場する月にも「三狐神」のイメージがあると想像されるのだ。

『玉置山権現縁起』をみれば、「三狐神」は「漢司符将軍の妻室」と書かれている。先に、王子晋の伝説でも触れたが、「漢の武帝」は、西王母を妻にしたとされ、楊貴妃の夫である玄宗は、No157号で示したように長恨歌で、この武帝と同一視され、「漢皇」とされていた。すなわち、「漢司符将軍」とは、「玄宗」の事であり、「漢司符将軍の妻室」とは、「西王母」であり、同時に「楊貴妃」であると考えられるだろう。No158号でも筆者は、熊野信仰が稲荷（狐）と密接に結びついており、楊貴妃にはキツネのイメージがあったことも示したが、「三狐神」に楊貴妃のイメージがあった事は間違いないだろう。

「三枚月」が「三狐神」であるとすれば、この『熊野権現垂迹縁起』の後段部分は、熊野の犬飼千代定が、大斎原に「楊

貴妃」を祀った事を現すに違いあるまい。

現在の大斎原（おおゆのはら）では、ここに祀られた神の名前を「家都美御子大神（けつみみこのおおかみ）」だとしている。先に述べたように、狐は古語で「ケツ」と言う。「家都美御子大神（けつみみこのおおかみ）」とは、「狐美御子大神（けつみみこのおおかみ）」の意味であろうと筆者は考える。

※蛇足であるが、那智の古文書である『熊野山略記』にも、「漢司符将軍者於天竺被召仕臣千与定（正三位云々）末孫也、新宮東飛鳥三狐神ヲ為妻」とある。『熊野山略記』に挙げられる系図は極めて複雑で、『玉置山権現縁起』のように一筋縄で説明出来るものではないが、ここにも「漢司符将軍」や「千与定」「三狐神」などの名前があり、この『熊野山略記』でも熊野権現に大陸から渡って来たイメージや狐のイメージがあることに注目していただきたいと思う。

四　三体月と三胡

「三枚月」に関連する話として、「三体月」の伝説がある。これは、旧暦の十一月二三日に、熊野の山中に昇ってくる月が三体に見えると言う伝承で、現在でも、旧暦の十一月二三日には本宮や中辺路など、熊野の各地で観月会が行われている。

しかし、実際には、写真（図②）のような月が見えるだけで、三体に見えたと言う報告はない。

筆者は、この形にこそ意味があるのだと考えている。

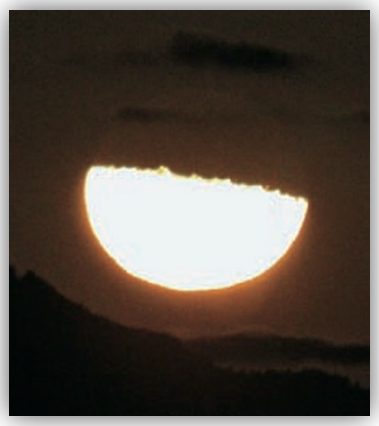
今は、弾圧によって無くなっているが、真言宗の一派に「真言立川流」と言う集団があった。

仏教学者である真鍋俊照氏は、「真言立川流」の教典に受胎から三七日（二十一日）後の胎児の形として、先のお椀のような半月の形を閉戸（へいし）、または、三胡形（さんこがた）と言ったとあると紹介している。[9]（図③）

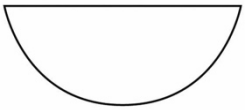
月に胎児のイメージがあったのは、群馬県に「産泰神社」と言う安産守りの神社があり、各地に、「産泰様」を祀るとして「月待ち」の習慣がある事でもわかる。[10]

おそらく、「三体月」とは「産泰月」の意味であろう。

さて、この「三胡」だが、ここには、「三狐」の意味が隠されているだろう。日本最初の百科事典である『和名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）』の「狐」の部に次の



図②　11月23日の観月会で見られる月
平成25年紀伊民報記事より



図③　三胡

ようにある。[11]

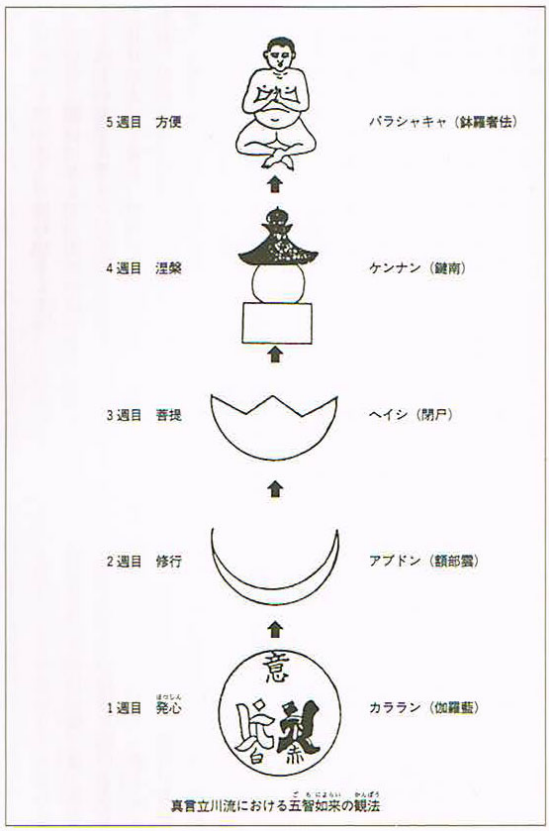
和名類聚抄　狐の部　抜粋

音胡和名木豆爾

訳

音は胡、和名は木豆爾

すなわち、「胡」には「狐」の意味があると考えられる。先ほど、「熊野の犬飼と三狐神」の章で述べたが、「三狐神」には、月のイメージがあった。この「三胡」の形に「三狐神」の意味がある事は間違いないことと思う。



図④　真言立川龍における胎児の成長過程

しかし、「真言立川流」を少し、知っている方なら、これでは納得しないかもしれない。「真言立川流」はいかがわしい邪教集団で、そのために弾圧されたのだ・・・・そのような邪教の言うことなど考察に価しないと思うかもしれない。

上の模式図は、藤巻一保氏による真言立川流の教義における胎児の成長過程を示したものである。[12]（図④）

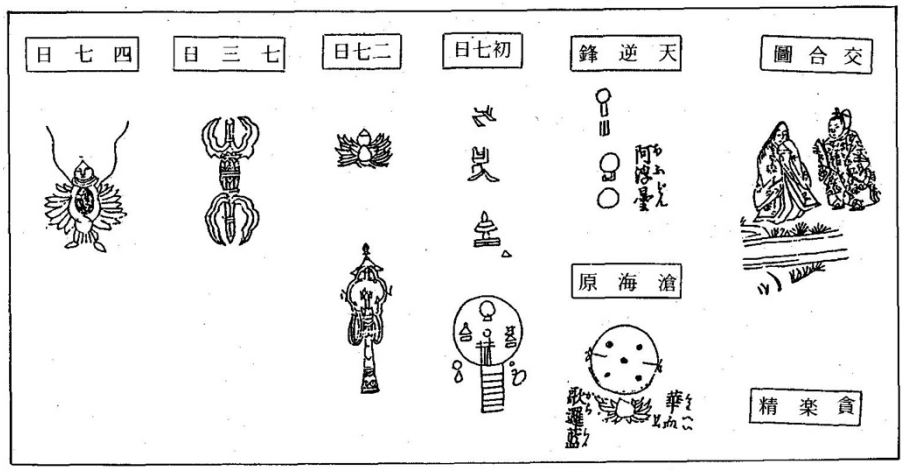
少し、形が違うが、3週目のヘイシ（閉戸）が先に示した「三胡」である。（「三胡」には、図③のような半円と図④のように三つの先が尖った卵の殻が割れたような形と2種類の形が併説している。）

図のように、第1週目から、「カララン」「アプドン」「ヘイシ」「ケンナン」「パラシャキャ」と言う過程を通って人の形になるとされていたことがわかる。

一方、釈尊の説いたとされる古い教典（原始経典）に次のような記述がある。

相応部Ⅱ「夜叉との問答」抜粋

（世尊曰く）最初にカララ（kalala）があり、カララからアッブダ（abbuda）があり、アッブダからペーシー（pesi）が生じ、ペーシーからグァナ（ghana）が生じ、グァナからパサーカー（pasākha）が生じ髪、毛、爪が生じる。そして、母が食物、飲物の食事を摂れば母胎にいる人は生長する[13]



（『日本思想闘諍史料』第５巻より）

図⑤　胎内十月の図

真言立川流における「カララン」「アプドン」「ヘイシ」「ケンナン」「パラシャキャ」が原始経典における「カララ」「アッブダ」「ペーシー」「グァナ」「パサーカー」に対応するものである事は言うまでもない。すなわち、先ほどまでに述べた真言立川流の考えは、仏教における正当な教義に基づく考え方から出現したものであることがわかるだろう。

さて、この考えを「胎内五位」とも言い、これを、阿字（梵字）、錫杖、三鈷、宝珠などの仏具で表す事もあった。[14]（図⑤）

この図は、男女が出会い、交わり、胎内で胎児が成長して行く様子を表しているが、男性器が「天逆鉾」、女性器が「滄海原」になっているのが面白い。

すなわち、「交合」のイメージが、『古事記』や『日本書紀』のイザナギとイザナミの国作りのイメージとなっているわけだ。

そして男性器から滴り落ちる滴、すなわち、精液を「阿浮曇（アプドン）」、華血（月経？卵子？）を「歌邏藍（カララン）」と呼んでいることもわかる。

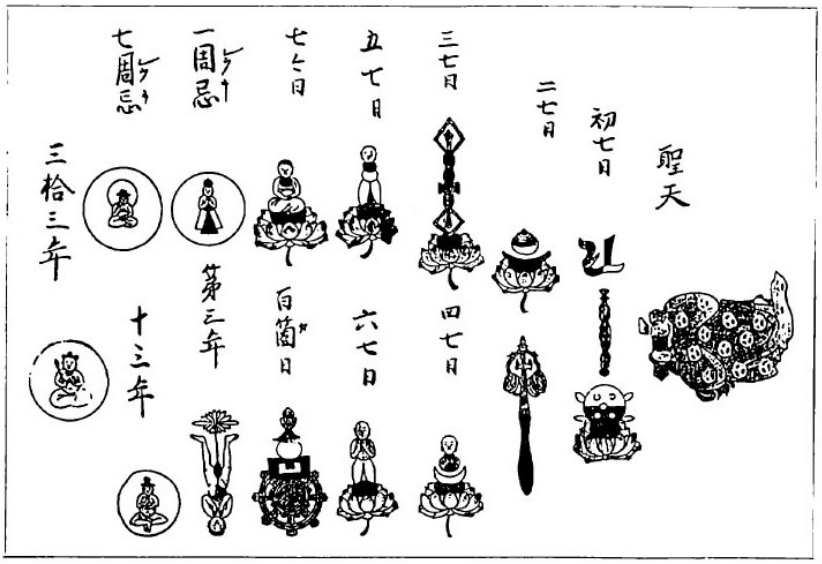
すなわち、これは、もう仏道の世界を離れ、神道の世界へ行ってしまっているわけだが、「カララン」「アプドン」などの言葉が、意味が変わりながら、そのまま使われているのも面白い。

さらに、この図で、胎児の成長過程が「初七日」「二七日」などと書かれている事にも注目願いたい。

落語の『子褒め』に「お七夜」を「初七日」と言って顰蹙をかう場面があるが、まさしく、「お七夜」には「初七日」のイメージがあったことがわかる。

この胎児が成長し、誕生するイメージには、人が死んでから、仏となるまでのイメージが重ねられていたのである。

もう一つ別の図を見てみよう。[15]（図⑥）これは、見ての通り初七日から三十三回忌まで、人が亡くなってから仏に生まれ変わるまでの様子を描いたものである。



図⑥　追善供養の絵とき

この図が、先ほどの胎児の成長過程を示した「胎内十月の図」と、よく似ているのも解るだろう。

面白いのは、図の一番、右側、ここは、本来、人の死が描かれるべきところのはずだが、よくみれば、男女の二人が同衾しているところが描かれているのがわかる。

すなわち、この図では「死」と「交合」が同一視されているのだ。そして、この事は、「人の死」と「人の誕生」が同じものだと言う思想があった事になる。

熊野に「蘇り」のイメージがあった事は、「小栗判官伝説」でよく知られている。「小栗判官」は、一旦、黄泉の国に落ちるが、熊野の霊験により、この世に戻ってくるのだ。

図⑦　北郡越の和合神（道祖神）

稲葉根王子から滝尻王子に向かう石田川（いわたがわ）、現在の富田川が、三途の川であるとは、山本ひろ子氏が、慈遍が鎌倉時代の終わり、元弘三年（１３３３）に書いた『天地神祇審鎮要紀』に書かれた例をあげ、説明している。また、室町時代の寛正六年（１４６５）乗円が書いた口伝書『小笹秘要録』の『神代巻秘決法祭熊野参詣品第五』には、熊野参詣が葬送の作法だと書かれている事を紹介している。[16]

三体月が胎児の形である事を合わせて考えるならば、熊野には、死んで、再び、生を受け、胎児として成長し、仏として生まれてくるイメージがある事になろう。

石田川（三途の川）から滝尻（浄土）に入る寸前、北郡越（ほくそぐごえ）には和合神が立ち並ぶ。（図⑦）そして、真砂（まなご）の里には、熊野参詣の僧に少女が夜這いをかける清姫の伝承地がある。死から生への転換地点に、男女の交合のイメージがあるわけだ。

滝尻（熊野の浄土）に入ると、今度は、胎内くぐりがあり、また、藤原秀衡が、そこに赤ん坊を残したとの伝承がある。

すなわち成長していく胎児のイメージがある。

さらに、次の図を見ていただきたい。（図⑧）これは、江戸時代に描かれた大斎原の絵図であるが、この絵をよく見れば、大斎原がリアルな女性器の形を模（かたど）って作られていたことがわかる。

図⑧　熊野本宮末社図（熊野大斎原）江戸時代

大斎原に楊貴妃が祀られていたと考えるならば、これは、巨大な楊貴妃の女陰であろう。熊野参詣とは、参詣道（産道）を通り、この絶世の美女の胎内から再び生まれてくる事をイメージしていたと筆者は考える。

五　南山の犬飼と飛行三鈷

さて、もう一度、図⑤、図⑥を見ていただこう。ここに描かれた三七日／七三日（二十一日）の胎児は、三鈷杵の形で表されている。この三七日（二十一日）後の胎児の形が三胡（さんこ）であり三体月であった。この月にキツネ（三狐）のイメージが存在していた事も、すでに前章で述べた。（三胡には、お椀のような半月と三つの先の尖った形があったが、三つの先の尖ったイメージの元は三鈷であろう。）

再び、『熊野権現垂迹縁起』を思い起こして欲しい。

三体月が『熊野権現垂迹縁起』に出てくる三枚月のイメージの産物である事は間違いないだろう。三体月（三胡）に三鈷杵のイメージがあるなら、三枚月にも同じ三鈷杵のイメージがあるに違いない。

さらに、後御鳥羽上皇に付き従って熊野にやってきた藤原定家は、発心門で、次のような詩を残している。

慧日光前懺罪根　　慧日光前罪根を懺す
大悲道上発心門　　大悲の道上発心の門
南山月下結縁力　　南山月下結縁の力
西刹雲中弔旅魂　　西刹の雲中旅魂を弔す

後鳥羽院熊野御幸記

この詩の中で、定家は、熊野を「南山」と呼んでいる。

三枚月は、熊野の犬飼千代定によって祀られたと『熊野権現垂迹縁起』に書かれていたが、「熊野の犬飼」が「南山の犬飼」であり、「三枚月」が「三鈷杵」であるなら、おそらく、多くの方が全く別の伝説を、思い浮かべるであろう。

すなわち、これは空海の伝説である。

空海は、明州の港から、三鈷を日本に投げ、この飛んで行った三鈷の行方を捜したとされる。そして、南山の犬飼の導きによって高野山にこれを発見し、そこに寺院を作ったと、これは、康保（こうほう）五年（９６８）に、書かれたとされる『金剛峯寺建立修行縁起』に書かれる。（飛行三鈷　図⑨）

筆者は、この三鈷とは三狐の意味であろうと考えている。吉備真備には、キツネの美女を連れてきた伝説があり、ここに楊貴妃の渡来説が隠れていることを、前号（Ｎｏ１５８号）で示したが、空海も、狐の美女（荼枳尼天）を招来したと言われている。

図⑨　飛行三鈷杵　金剛峯寺

さらに、本論考の最初の方で、楊貴妃の出航した港を明州だと推定した。すなわち、明州の港から飛んで行った三鈷とは楊貴妃であったと筆者は考えるのだ。空海は、この明州の港に立ち、先に明州の港を旅立って行った楊貴妃の日本での行跡を追いかける事を決意していたのではなかっただろうか。

そして南山の犬飼に出会う事によって、それを発見したのだ。

筆者はこのように考えている。

結び

Ｎｏ１５７号の結びで、筆者は熊野の楊貴妃信仰をつくった者を８０６年以降の密教の指導者であったと述べたが、誰が最初に言いだした人間かと言う事については明言を避けた。

今回、ようやく、熊野信仰が空海の伝説と結びついていると言うところまで示すことができた。

今、新たに、楊貴妃信仰を最初に作りだした人間を「空海」であるとしよう。

いや、今回の論考など、無理矢理な辻褄合わせであって、根拠とは認められないと言う方もみえるだろう。

筆者自身が、現段階の論考まででは、そう言われても仕方がないと考えている。

空海が楊貴妃の行跡を追いかけていたなどと、言っているのは、筆者の知っているかぎり、映画にもなった夢枕漠の小説『沙門空海唐の国にて鬼と宴す』ぐらいのものであろう。

無論、『沙門空海唐の国にて鬼と宴す』は荒唐無稽な伝奇小説であって、そこから読み取れる論理的・科学的根拠など有りはしない。

しかし考えて欲しい。筆者は、ここまで、熊野信仰が楊貴妃信仰と密接に結びついていた事を示した。そして、熊野信仰は密教と深い関わりを持っていた。空海に楊貴妃の影響を考えない方がおかしいではないか？

本論考で、筆者は、熊野信仰を真言立川流の考えで説明した。

真言立川流は、弾圧により廃絶された邪教集団であって、論考に値しないと言う方もみえるだろう。

しかし、本論考に示したように、この思想の根本にあるものは、仏教の原始経典思想、すなわち、釈尊の本来の思想を受け継ぐものであり、本来の密教の思想、すなわち空海にもこの真言立川流の考えと同じものがあったと考えられるのだ。真言立川流が邪教だからと言って、始めから、考慮に値しないとする態度はよろしくないだろう。

真言立川流の思想は、空海の思想の一端を受け継いだものであったと筆者は考える。

しかし、真言立川流は、それが女神信仰（楊貴妃信仰）に特化した集団であったがために危険視され、弾圧されたのではないかと筆者は考えている。

次回、さらに論考を進め、空海と楊貴妃の信仰の関連を巡って立証していくこととする。

補足

本論考は、筆者がａｍａｚｏｎで出版している

「龍神楊貴妃伝１楊貴妃渡来は流言じゃすまない」

http・://www.amazon.co.jp/dp/4990960408/

および、「龍神楊貴妃伝２これこそまさに楊貴妃後伝」

https://www.amazon.co.jp/dp/4990960416/

の一部を抜粋し、再編したものである。

注

⑴ 『長寛勘文』

平安時代の長寛年間（１１６３年 ～１１６４年）に編纂された勘文。熊野社領である甲斐国八代荘で発生した八代荘停廃事件を機にまとめられたもので、平安後期における国衙と荘園の対立を物語ると同時に、熊野と伊勢との祭神が異なることが公式に確認された文書

https://ja.wikipedia.org/wiki/長寛勘文

(2)『彦山流記』

福岡県田川郡添田町役場発行「彦山流記」参考

(3)『神道集』

安居院唱導教団の著作とされ、南北朝時代中期に成立したとされている。全十巻で五十話を収録。

https://ja.wikipedia.org/wiki/神道集

(4)『王子晋（姫晋）』王子登仙

太子晋挥手与世人作别，升天而去，这也就是“王子登仙”的传说。

訳

太子が人々に手を振って別れ、天に昇っていくとは、これは即ち「王子登仙」の伝説である。

https://baike.baidu.com/item/姫晋/8554013

(5)『漢武内伝』

中国，六朝時代の志怪小説。作者未詳。前漢の武帝の行状を書いたもの。『漢武帝内伝』ともいう。

https://kotobank.jp/word/漢武内伝-49562

忽见一女子，著青衣，美丽非常。帝愕然问之，女对曰：“我墉宫玉女王子登也，向为王母所使，从昆山来。”

訳

忽然と青い衣をまとったとても見目麗しい女性が現れた。帝はこれに驚き女に尋ねると女は次のように答えた。「私は墉宮の玉女王子登です。西王母の使いとして、崑崙山からやって参りました」

https://baike.baidu.com/item/汉武帝内传

(6)白居易　『霓裳羽衣舞歌』

散序六奏未动衣，阳台宿云慵不飞。

訳

散序六奏、未だ衣を動かさず、陽台（テラス）に上がるのも物憂げで飛ぶ気配もない。

https://so.gushiwen.org/shiwenv_89e36eb01402.asp

(7)『玉置山権現縁起』

神道大系　Ｖｏｌ．神社編５大和国　神道大系編纂会

(8)『倭姫命世記』

神道五部書の一。７６８年禰宜五月麻呂の撰録と伝えられるが、鎌倉時代、伊勢外宮の度会氏が編纂したものとされる。天地開闢より雄略天皇代の外宮鎮座に至る次第を詳細に記す。

https://kotobank.jp/word/倭姫命世記-649457

(9)真鍋俊照　『邪教立川流』　ちくま学芸文庫

(10)『野口の二夜様と産泰様　伊那市手良』ビデオ映像

科学映像館　ＮＰＯ法人　科学映像館を支える会

http://www.kagakueizo.org/create/visualfolklore/515/

(11) 『和名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）』
平安時代中期に作られた辞書である。承平年間（９３１年～９３８年）、勤子内親王の求めに応じて源順（みなもとのしたごう）が編纂した。
https://ja.wikipedia.org/wiki/和名類聚抄
(12) 藤巻一保『真言立川流』　学研
(13) 池上要靖
『釈尊は生と死をどのように語ったか』
平成２２年１１月２９日
日蓮宗生命倫理研究会講演資料
http://www.nvn.cc/lecture/ml07_b.pdf
(14) 中村一基『「胎内十月の図」の思想的展開』
岩手大学教育学部年報　第５０巻第１号
https://core.ac.uk/reader/144252160
(15) 宮家　準『追善供養の絵とき　―当山派修験の地域定着―』
慶應義塾大学大学院社会学紀要　第３６号
http://koara.lib.keio.ac.jp/.../AN0006957X-00000036-0063.pdf
(16) 山本ひろ子『変成譜　中世神仏集合の世界』
講談社学術文庫